

## 令和6年度入学式 式辞

### 式辞

今日未明まで降り続いていた雨もあがり青空が広がり、また、昨年の入学式では生徒昇降口前に植えられている“高松桜”は、すでに“葉桜”の状態となっておりますが、今年は新入生の皆さんの入学を祝うかのように咲き始めました。

この佳き日に、伊藤同窓会長様、田中PTA会長様をはじめとする来賓の方々をお迎えして、令和六年度長野県飯田高等学校入学式が挙行できますことは、私どもにとりまして大きな喜びでございます。

只今、入学を許可いたしました普通科202名、理数科41名、計243名の新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。皆さんは、これまで日々努力を積み重ね、強い意志をもって本校を志願、入学者選抜を突破して本校に進学してきました。本校は、明治33年、西暦千九百年、長野県飯田中学校として独立以来、今年度で124年の歴史と伝統を刻む高等校です。これまで二万六千人余り、旧制中学時代を含めると、三万人を超える卒業生を輩出し、県内外はもちろんのこと海外においても、様々な分野で活躍しております。皆さんも、本校に入学した今の気持ちを忘れずに、これからの高校生活を充実した、実り多きものにして下さい。

さて、現在、私たちを取り巻く様々な環境、状況は非常に不安定化しており、私たちの日々の生活にも大きな影響を及ぼしています。また、今年の元日に発生した能登半島地震では、人智が及ばぬ自然の脅威を改めて実感させられました。そんな中、日本やアメリカ、中国など6カ国で行ったある調査で「自分の行動で国や社会を変えられる」と答えた17～19歳の割合が、中国70%、米国58%、かたや日本はどうかというと26%で、他国に遠く及ばぬ最下位でした。このことは、日本の若者の間で、社会や政治への無力感が高まっている現れだと思えます。また、先日も長野県の人口が二百万人を下回ったということが大きく報道されましたが、今後日本は加速度的に少子化が進み、縮小社会となっていくことは避けられません。しかし、このような状況を前にして、手をこまねいているわけにはいきません。これからの時代を切り拓いて、未来を創造していくのは、皆さん自身だからです。これからの高校生活では、悩むこと、思い通りにならないことも多々あることと思いますが、決して受け身の姿勢ではなく、仲間と切磋琢磨しながら、授業や班活動等に主体的に取り組んでもらいたいと切に願っておりますし、本校ではそのように取り組める環境が整っています。

また、皆さんは本校に入学すること、そして高校生活の延長線上にある大学などに合格することが、決して目的ではありません。本校の生徒育成方針の一つに「国内外で活躍しながら、地元地域の発展にさまざまなかたちで貢献する人」を掲げています。先日、リニア中央新幹線の開通が大幅に遅れるとの発表があり、誠に残念ではありますが、いずれこの飯田・下伊那地域は大きく変貌することになるでしょう。皆さんが見つめる未来の先に、何らかの形でこの地域との接点、結び付きがあることを願っています。

もう一つ皆さんには話しておきたいことがあります。先程触れたように、本校は124年の歴史がありますが、その中でも決して忘れてはならない出来事があります。それは、今から32年前の平成4年1月に、当時高校二年生の小野寺仁君の尊い命が、校内において突然奪われ、彼が思い描いていた未来への扉が閉ざされるという出来事です。この悲しく、痛ましい出来事が二度と起こらぬように、職員・生徒が一丸となって、「高松‘92宣言」を掲げ「規律ある学窓」「反暴力」を確認し、安心・安全な学校づくりに今も取り組んでいます。新入生の皆さんにも改めて他者の人権を尊重し、共に成長し合えるような学びの場を創造、維持に努めてもらいたいと願っています。

最後になりますが、保護者の皆様一言申し上げます。お子様のご入学おめでとうございます。社会の激しい変化に伴い、今、学校教育を取り巻く状況は大きく変わろうとしています。しかし、「教育とは、今を積み重ねた先にある未来を創造する営み。未来とは希望であり、子どもたちが持つ可能性への期待と信頼」です。このことはいつの時代においても不変であり、そのためには、学校と家庭が協力し、同じ思いで子どもたちと接し、育てることが大切なことだと考えます。学校との連携を密にしながら、ご家庭でも子どもたちと話し合う機会を大切にし、その成長を温かく見守っていただきたいと思います。

以上、入学式に当たり、思うところの一端を述べ、式辞といたします。

令和6年4月4日  
長野県飯田高等学校長  
駒瀬 隆